書　評・紹　介

加藤久和

『人口経済学入門』

日本評論社，2001年５月，292pp.

本書の題名にある「人口経済学」は，「広義」の出生力の経済分析と考えて差し支えないであろう．近年の経済理論と計量手法の進展に伴い，その分析ツールを用いた出生力の分析も一層の展開を見せており，それは単に議論の精緻化のみならず，有意味なインプリケーションをも与え続けている．著者が「欧米では Population Economics という学問体系はすでに市民権を持っており，…」と述べているように，人口経済学が応用経済学の確固たる一領域になったことが，最近の経済学のハンドブックの題名（「Population Economics」，「Population and Family Economics」等）からも窺い知ることができる．以下に，本書の内容を簡単に紹介する．

出生行動や結婚を正面から明示的に捉えた経済分析は G.S.ベッカーの貢献を端緒とするが，彼の関心は人間の社会行動全般にあったが故に，分析対象は広範囲に及び，その研究の多くが後に発展する諸領域の源流となった．第２章では，この源流のひとつであり，現在ではミクロ理論による「出生行動分析」のベンチマークと考えられているベッカー，ウィリス等による子供の質・量モデルを，最近の話題も含めて詳解している．また第４章で採りあげられた「結婚の経済学」は，我が国の晩婚化・少子化現象を考察する上でも今後の発展が望まれる領域である．惜しむらくは，非協力ゲームの最も基本的な均衡概念であるナッシュ均衡等の説明がないことである．本章では協力ゲームや家計内公共財も扱っており，この均衡の簡単で直観的な説明があれば，各モデルのねらいが一層明確なものになったと思う．

第３章では「経済成長と人口変動」の関係を論じている．R.M.ソロー等に帰される新古典派的成長モデルに対し，最近は内生的成長モデルの分析が盛んである．それまで外生的与件とされてきた出生力の内生的な扱いは，これまでとは異なった経済成長のヴィジョンを与える．本章では，出生力と人的資本ストックの成長を明示的に分析したベッカー＝バローからアーリッヒ＝ルイまでの成長モデルを用いて，人口変動と経済発展の因果関係にメスを入れている．経済発展や開発経済に関心を持つ読者も，この章から新たな知見を得るに違いない．

本書後半の内容は，著者の専門領域でもある出生力の計量分析が主要なテーマとなっている．第５章では，人口データを基にスタイライズド・ファクトを再構成し，人口変動と経済成長に関する代表的な計量分析を紹介している．そこには著者自らの統計検定を含む人口の「構造転換」の分析も含まれている．第６章のテーマは「女性の労働供給と出生・結婚」である．この領域における多数の先行研究の要約とともに，著者自身による，最近の統計ツールを用いた計量分析の試みがここにある．女性労働市場の分析で欠かすことのできないバッツ＝ウォード・モデルの統計検定を行い，このモデルの定式化そのものに異義を唱えている．最終章は，世論を賑わせている「少子高齢化と社会保障」を扱っている．年金システムの議論は最終的に賦課方式採択の是非ないしは軽重に帰着するので，これは人口構造の議論でもある．財政学的な解説を散見している読者は，本章の人口学的アプローチを新鮮に感じるであろう．

本書の特徴は，ややもすればどちらか一方に傾きがちな入門書が多いなかで，ミクロ・マクロ経済理論と実証分析の適切なバランスを考慮している点にあり，これが本書を人口経済学の入門書に相応しいものにしている．著者の苦心の跡がうかがえる．また研究を志している者にも，本書はバランスのとれた「この領域の鳥瞰図」を提供するはずである．

人口問題はいつの時代においても，古くて新しい問題であった．マルサス以来の「器」に盛られた年代物の酒を新しい器に移し変えて飲むと，格別の味がするかもしれない．先人の言葉「古き美酒は新しい器に盛れ」に従い，本書『人口経済学入門』の試飲を読者に薦めたい．

(佐々木啓介／東洋大学経済学部)